

## 「松村先生、記憶に残る軽井沢でのレッスン」

朝、東京から私の運転で軽井沢に出発し、軽井沢に到着直後「善は急げ！」ということで、その夜、力尽き果てるまでマージャンをします。先生は明朝未明、まだ旅行同行者が寝ている時分から中二階のピアノのところに行かれ、ポロンポロンと作曲をなさいます。そして、それが終わると私のレッスン（先生の作曲が無い時もあります）。朝5時ごろ、私が寝ている布団のところへ先生がいらして「やるか。」と小声でおっしゃられ、中二階へ行かれます。私は90%以上寝ぼけながら中二階へ上がります。完全に無防備状態です。レッスンが始まり幾分時間が経つと、朝日が落葉松の間から差し始めるのが見えてきます。尊い神聖な時間でした。（レッスンをしていただいているうちに、久寿美さんが、のそりのそりと起き始め朝ごはんの雰囲気やし始め、レッスンは終わります。）

このような形で先生は私の曲を何度となく見てくださいました。その時間は聖なる時間であり、私の大好きな時間でした。以降の文面は、軽井沢での初めてのレッスンだと記憶しています。

合唱曲を先生が見てくださった時のことです。まだ私が右も左もわからない時分でした。現代曲なんて同じようなものばかりで嫌いだと言っていた生意気な時分です。先生は私の合唱曲をピアノで弾きながら「これはママさんコーラスだよ」とおっしゃいました。おっしゃられはするもののピアノを弾く手は止めません。実を申しますと、私は最初、「ふん。」ぐらいにしか、先生のお言葉を受けとめていませんでした。先生はピアノを弾く手を止めず、怒ることもせず、私の音符をととも丁寧弾いてくださり、先生自身で何かを感じてくださろうとなさいました。「ふん。」と思っていた私は、先生の音符に対する真摯な行為を目の前に、この音符を先生に提示したことを、だんだん申し訳なく思い始めました。先生の手はまだまだ止まりません。先生がだんだん悲しまれていくように見えました。自分を情けなく恥ずかしく思いました。もう曲なんてどうでもよい、早くこの恥ずかしい時間から解放されたい、と願うようになりました。しかし、先生の手は止まりません。「お母さんや彼女にいくら甘えてもいい。音楽だけには甘えるな。」先生はまだ、弾いてくださっています。レッスンが終わり、先生にそんな譜面を見せてしまったことが申し訳なく、また、自分が情けなく、先生の別荘のトイレに閉じこもりました。悔しくて、情けなくて、涙が出てきて、泣きやめず、2・3時間？トイレに閉じこもって泣きました。先生や友人が何度ノックをしても鍵を閉めて反応しませんでした。トイレットペーパーで涙を拭き、鼻をかみ、便器に流す。この行為をかなり長い時間続けました（トイレットペーパー3本ぐらいは消費しました）。水洗トイレがまともに機能しなくなり、水があふれ出し、先生の別荘の1階の床が水浸しになってしまいました。（この時、私はトイレから出ることとなります。その時一緒に居た友人：菊池幸夫氏）

この旅で、久寿美さんに私の靴下とパンツを洗わせてしまい、しばらくの間「私は塚本に靴下を洗われた」と言われ続けました。

そして「善は急げ!」、先生と私のマー جان人生が始まります。(善というのは先生にとってマー جانであり、いつもマー ジャンを始める前に「善は急げ!」と楽しそうに意気込んでおっしゃっていました。)

2012年5月

塚本一実